

アラスカ、北アメリカには存在しない。したがって近縁種のない独立の節に位置する日本固有の特殊な種でないかと考えていたが、*P. gentianoides* Sibth. et Smith が非常に近い種であることが分かった。これはスカンジナビアからトルコを通り、アフガニスタンに至るかなり広い範囲に分布する。種子の形、蒴の形など完全に一致する。アフガニスタンのものは変種とされていてやや異なるが、中央アジアのものはハクサンオオバコとどこが違うかわからないほどよく似た種類である。雪解け水の流れる湿地に生えるというから成育環境も似ている。オオバコ科全体の分類を行った Pilger (1937) はハクサンオオバコを十分に認識してなくて、これをオオバコ節のものとして扱っていて、*P. gentianoides* 1種だけでひとつの節を作っている。ハクサンオオバコも含めるとこの節には2種あることになる。日本の雪田群落を構成する種類の来歴は非常に複雑である。その中でもハクサンオオバコのような例は珍しいが、日本の雪田群落の解明には中央アジアに広がる二千から三千メートルの山地の積雪地帯の植物の研究も必要で

あることを示している。

京都大学の標本を調べて下さった村田 源氏、写真を提供して下さいました米山競一、土肥行雄氏に深謝します。

*Plantago hakusanensis* Koidzumi f. *glabra* Yamazaki, f. nov.

Jap. nam. Kenashi-hakusan-obako.

Folia glabra. Cetera ut in typo.

Hab. Honshu, Nagano pref., Mt. Shirouma, Ohike (M. Honda, July 29, 1928, Type, TI).

Distr. the Japan Sea side of Honshu from Nagano and Toyama Prefs. to Akita Pref.

*Plantago hakusanensis* Koidz. has anthers with a slender acuminate projection at the apex and seeds concaved at the ventral face. These features are same as those of *P. gentianoides* Sibth. et Smith of C. Asia belonging to the monotypic section, *Gentianoides* Pilger.

(東京大学理学部附属植物園)

### ドウダンツツジの変異 (山中二男)

Tsugiwo YAMANAKA : Variations in Leaves of *Enkianthus perulatus* (Miq.) Schneid.

ドウダンツツジ *Enkianthus perulatus* (Miq.) Schneid. は、古くから栽培されていたながら、自生地が明らかになったのは1913年といわれるから(吉永1914, 中井1936), それほど昔のことではない。今では、本州の伊豆半島以西の主として東海地方と四国のほか、九州にも分布することが知られている。生育地は多くないが、静岡県島田市や引佐町、愛知県鳳来町と新城市、三重県鳥羽市の菅島と伊勢市の朝熊山、徳島県木沢村、高知市とその周辺などで、超塩基性岩地帯に群生するところもある。

ドウダンツツジの葉の形には変異が多い。野生しているのは、ほとんどが倒卵形のヒロハドウダンツツジで、中井はこれを var. *japonicus* (Hook. f.) Nakai in J. Jpn. Bot. 12 : 896 (1936) と

した。栽培のドウダンツツジでよく見られる葉の広皮針形～狭倒卵形のは、高知県日高村だけにしか自生が知られていないとされてきた。

北村 (1971) は、「(日高村) 錦山には葉が広卵形のものもあり、変種として区別するのは困難である」として、ヒロハドウダンツツジを f. *japonicus* (Hook. f.) Kitamura in Act. Phytotax. Geobot. 25 : 36 (1972) に変えた。山崎 (1989) は、「(ドウダンツツジは) 広く栽培され、似たものが高知県日高村の錦山に野生する。…錦山にはヒロハドウダンツツジもあり、ドウダンツツジは葉の狭いものを選んで園芸化したのであろう」と述べている。

こうしたことから、錦山には葉の狭いドウダンツツジが普通のようにも思われているが、実際は

ほとんどがヒロハドウダンツツジである。このほど、錦山（5万分1地形図伊野にはこの注記はなく、妹背峠の北で近くに錦山ゴルフ場ができてい）から槇山（おなじく、鳥越の西で清宝山の北）までの日高村のほか、高知市とその近くの土佐山村と鏡村で、あわせて180個体から、それぞれ標準と思われる形と大きさの葉を選んで、調べてみた。

結果は Fig. 1 のようになり、日高村では葉の長さ20~34mm, 幅15~20mmのものが多く、長さの幅に対する比は平均が錦山で1.6, 槇山で1.7で、2以上になるのは非常にまれなことがわかった。土佐山村と鏡村でも傾向はほぼおなじで、大きさに多少の違いはあるが、長さは幅に対してどちらも平均1.7であった。

もっとも、鏡村では一部で葉の長いものが目についた。平均2.2の木は、ドウダンツツジそのものの形といえるが、これでも葉によって1.9~3.6の変異が見られた。ちなみに、栽培の葉の狭いドウダンツツジでは、2~3, 平均2.7前後が多い。

そこで、高知市内の二か所で、あらためて栽培のものにあたってみた。たしかに、かなり多くの葉の幅は狭いが、広いものもまじっていて、ここではヒロハドウダンツツジを品種として区別することも難しくなる。また、明らかにヒロハと違ってよいものを植えているところもある。なお、杉本（1984）は、「天城山に葉が広卵形から倒皮針形のものまで変異があって混生し、葉の広狭では区別できない」と言っているが、ここでの幅に対する長さは1.5~2.2であった。

以上のようなことから、ヒロハでないドウダンツツジは、日高村でもほとんど見られないし、自生がそこだけともいえない。それに、栽培のものにはヒロハの形もあるから、これらの違いはそれほどはっきりしているとは思えない。近ごろは、それらのドウダンツツジを、市街地で見ることが多くなった。しかし、自生地の実状は、地域によっていろいろのようである。

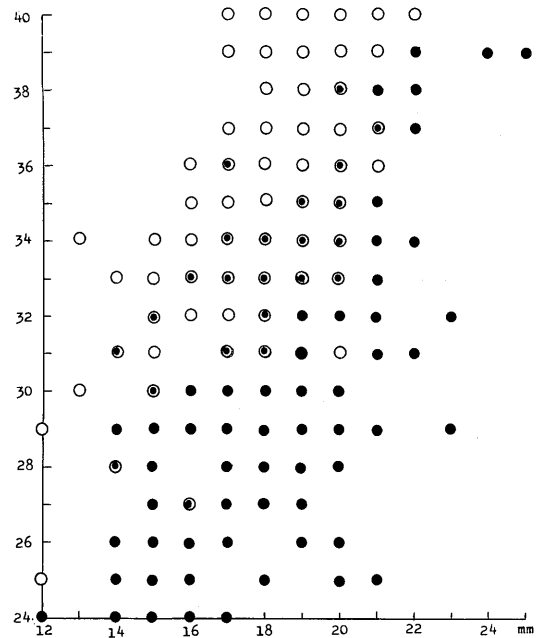


Fig. 1 Diagram showing the length (on the vertical axis) and width (on the horizontal axis) of leaves of wild (●) and cultivated (○) *Enkianthus perulatus*.

#### 引用文献

- 北村四郎 1971. つつじ科. 北村四郎・村田 源, 原色日本植物図鑑 木本編(1)115-181. 保育社, 大阪.  
 中井猛之進 1936. どうだんつつじ {*Enkianthus perulatus* (MIQUEL) SCHNEIDER} ハ伊豆ニモ自生スル. 植研12: 893-897.  
 杉本順一 1984. 静岡県植物誌. 814pp. 第一法規出版, 東京.  
 山崎 敬 1989. ツツジ科. 佐竹義輔ほか編, 日本の野生植物 木本II 122-156. 平凡社, 東京.  
 吉永虎馬 1914a. 土佐ニ於ケル蛇紋岩ト特殊植物トノ関係. 植雑 28: (40-42).  
 ——— 1914b. どうだんつゝじノ新産地. 植雑 28: (421).

(高知市 [redacted])